1A-4-5

震災！そのとき岩手病院は…

山川　志野
国立病院機構　岩手病院

【はじめに】

国立病院機構岩手病院（以下岩手病院）のある一関市は，岩手県の南の内陸部に位置している．東日本大震災で，津波による大きな被害のあった沿岸部とは100Kmほど離れているが，地震の揺れによる被害，また停電や断水による被害は甚大であった．当院の被害状況を報告し，少しでも他施設の災害対策の一助となればと思う．

また，震災から2カ月後に行ったボランティア活動についても述べ，震災時に求められた作業療法士のあり方について考察したい．

【当院の紹介】

岩手病院は，国立岩手療養所として昭和17年に当地に創設された．神経難病や脳卒中リハビリテーション（以下リハ），呼吸器，外科，重症心身障害児などを対象に220床を有し，リハスタッフは，理学療法士9名，作業療法士4名，言語聴覚士4名が在籍している．リハ室のある建物は，築43年の2階建鉄筋コンクリート造の1階である．

【岩手病院の状況】

2011年3月11日14時46分，大きな揺れが発生した．一関市の震度は6弱．当時勤務時間中であったため，スタッフはリハ室や病棟，患者宅への訪問など，様々な場面で未曾有の震災を体験することとなった．

災害マニュアルが整備されておらず，災害時の行動について何も準備がなかった一同は，患者および自身の安全を確保することで精いっぱいの状況であった．長く続いた揺れがおさまり，ようやく周りを見渡してみると，リハ室は棚や物品が散乱し，また窓ガラスが割れるなど，足の踏み場もなく惨憺とした有様だった．また，建物自体の被害もあり，床・壁のひび割れや歪みを生じていた．揺れの途中で停電となり，人工呼吸器などに自家発電での電気が使用された．緊急性の低いものは使用できず，テレビ・ラジオなどの情報は入手できなくなった．暖房も止まり，当時2.5度（気象庁気象データより）の気温の中，余震のたびに屋外へ避難し，余熱のあるホットパックやタオルを使用して暖を取った．停電は3日続いた．さらに，震災直後は出ていた水も次第に出なくなり，断水となった．飲水はもちろん，トイレや入浴にも支障をきたした．排泄は尿パットを便器に置き，使い捨てとして対応した．断水は1週間ほど続いた．その後，ガソリン不足を乗り切り，院内の片付けをして，リハ業務は震災3日後に病棟にて再開することができた．幸いにして人的被害はなかった．振り返ってみれば，岩手病院は国立病院機構の施設の中でも，地震の揺れによる被害が最も大きい病院であった．

患者だけでなくスタッフも不安な中で，最善の行動がとれたのか今でもわからない．しかし，できることを協力して行い，乗り越えた経験が現在も活かされていると感じている．

【ボランティアの状況】

震災から2カ月が経過し，院内も落ち着いた頃，日本作業療法士会および岩手県作業療法士会の災害支援として行われていた沿岸部へのボランティアに参加した．期間は2011年5月23日から27日まで，派遣先は岩手県釜石市及び大槌町で，主に避難所において活動を行った．

震災時，釜石市には最大88か所，大槌町には最大38か所の避難所があり，それぞれに全国から派遣された保健師が配置されていた．主にこの保健師からの情報を元に，体力低下・筋力低下している避難者に個別対応したり，避難所の段差解消・手すり設置などの環境整備，訴えの傾聴による心理支持，集団での体操を実施した．

このとき求められたのは，「作業療法士」ではなく，一人の「人」として，なんでもする姿勢であるように感じた．職種に囚われてしまうと，出来ることが限られてしまう．とにかく被災地に行くこと，それが重要なことだった．震災から1年2カ月が経過したが，今後も年単位の支援の継続が必要である．みなさんのご協力をお願いしたい．